

日清紡社長 岩下 俊士氏



いわした・たかし 1943年1月生まれ。66年東大法卒、同年日清紡入社、94年総務部長、97年資材部長(兼務)、99年取締役、2002年常務取締役・メカトロニクス事業本部長・ABS事業本部長、04年代表取締役専務総務本部長・経営企画室長、06年社長。

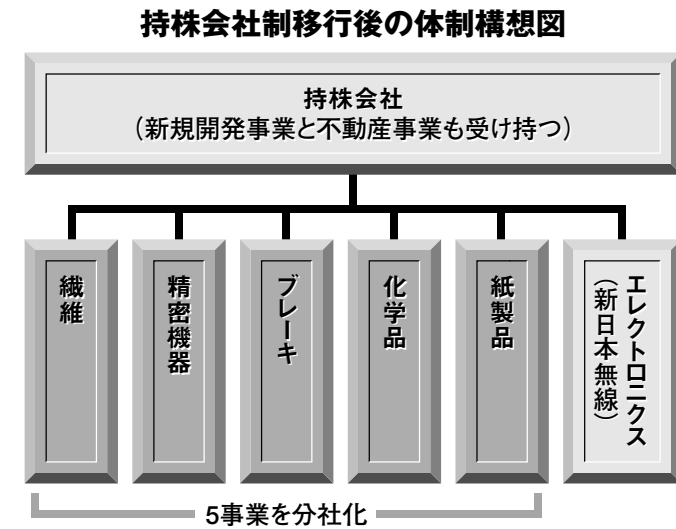
綿紡績からスタートし、自動車用ブレーキ、化学品など多くの成長領域を切り開いてきた日清紡。二〇〇九年四月の持株会社制への移行など、強みである多角化経営のさらなる推進に余念がない。岩下俊士社長に将来展望を聞いた。

持株会社制へ移行 多角経営を一段と強化

2007年度は過去最高を更新の見込み

〇七年度は経営三カ年計画の中間点に当たり、基本方針である「選択と集中」をより積極的に推進していきます。

繊維事業では生産工場を集約し、不採算部門の整理を行う一方、シャツ・デニムなどのコア事業に経営資源を集中しています。また、収益の大きな柱であるブレーキ事業は引き続き好調で、懸念された北米市場の冷え込みを、BRICsやアジアの自動車需要の増大がカバーしています。プラスチック成型加工品(空調機用ファン)も海外子会社が大増収となっています。その結果、連結業績は〇七年度通期全体で売上高、営業利益、経常利益、純利益、すべて過去最高を更新する見込みです。



業間競争の中では現状に甘んじる事は許されません。先日発表しましたが、当社は〇九年四月に持株会社制に移行するための準備に入りました。次なる飛躍、そして三カ年計画の仕上げのため、経営のあり方を変革する必要があると判断しました。

そして後段で詳しく説明しますが、カルボソライト、燃料電池セパレーター、電気二重層キャパシタなどの新規事業が来年度以降本格的に立ち上がりはじめます。これらの事業を通じて、新たに環境カンパニーへと変身する日清紡の姿をお見せできるでしょう。

当社を持株会社とし、繊維、ブレーキ、紙製品、化学品、精密機器の五つの事業本部を分社化します。各事業会社を経営権限を委譲することで、それぞれの事業環境に適した機動性を持たせ、競争力を強化する。さらに責任の所在を明確にすることで採算性やガバナンスの強化にもつながる。この分社化により、自主独立の気風が高まり社員モチベーションが向上すると期待しています。

このように分社化によって当社の強みである多角化経営を一層強化する一方で、事業活動を通じて広く社会貢献することを使命とし、グループとしての求心力の維持・向上を図ります。

また持株会社にはインキュベーター機能としての新規開発事業と、収益力の高い不動産事業を持たせる構想です。有望な新規開発事業については、黒字転換を急ぐあまり小さくまとまらないよう、大型新人を育てるつもりでじっくり取り組む考えです。不動産事業は数年以内に営業利益の倍増を見込んでおり、大きな収益の柱としてさらに成長できるでしょう。

日清紡は、分身する。

変身する。

太陽電池モジュール製造設備、カルボジライト、燃料電池セパレーター、電気二重層キャパシタ。これらは、いずれも環境貢献技術として巨大な成長性が見込まれる期待の事業だ。日清紡はこれらの事業を通じ、人類社会への貢献を目指すという。

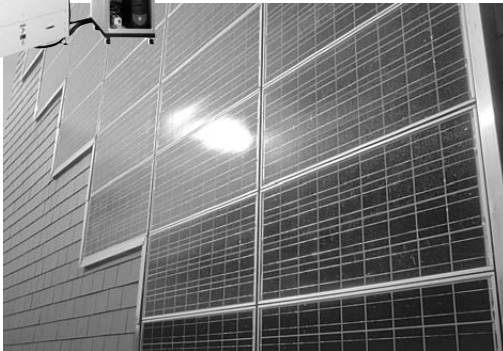
新規事業が本格化 環境カンパニーへの変身

当社では十年ほど前から太陽電池モジュールの後工程製造設備（ラミネータとシミュレータ）を製造しています。ほとんどの国内主要メーカーに納入実績があり、特にシミュレータは国内シェアの九〇％を占めています。これまでこの事業は通期売上高十億円程度で推移してきましたが、昨年六月のハイリゲンダム・サミットから猛烈なフォロワーの風が吹き始めました。今期は三十億円、来期はさらに倍増の勢いで国内外から受注をいただいております。

耐久性・柔軟性・軽量の面において優れた特性を有し、質・量ともに市場優位を確立していると自負しています。先日も燃料電池

という特徴をもった蓄電デバイスです。この特性を生かしブレーキング時に発生するエネルギーを電気としてため込み再利用する回生用途が期待できます。ハイブリッド車への搭載を目指し、カーメーカーとの開発を進めています。また、自動車の排ガス抑制のためアイドリングストップ機能を普及させるには、バッテリー寿命の低下を招くエンジンスタート時のピーク電力への対応が不可欠です。キャパシタはこのような用途にも最適です。

期は三十億円、来期はさらに倍増の勢いで国内外から受注をいただいております。当社でも生産が追いつかない状況が続いており、工場建設も日程に上ってきています。



太陽電池モジュールの検査装置「ソーラー・シミュレータ」(写真上)

カルボジライトは、植物由来プラスチックを強化するために不可欠な、極めて毒性の低い改質剤です。ポリ乳酸樹脂に代表される植物由来プラスチックは環境にはやさしいものの、もともと加水分解を起こしやすい、耐久性に難があります。しかし、製造の際にカルボジライトを添加することにより、この加水分解を抑制することができるようになります。

メーカー各社が〇八年度から量産を開始するという報道がありました。クリーンエネルギーとして大きな期待のかかる燃料電池は家庭への本格普及期が目前に迫ってきました。

電気二重層キャパシタは大量の電気を極めて短時間で充電し、一気に放出でき

るという特徴をもった蓄電デバイスです。この特性を生かしブレーキング時に発生するエネルギーを電気としてため込み再利用する回生用途が期待できます。ハイブリッド車への搭載を目指し、カーメーカーとの開発を進めています。また、自動車の排ガス抑制のためアイドリングストップ機能を普及させるには、バッテリー寿命の低下を招くエンジンスタート時のピーク電力への対応が不可欠です。キャパシタはこのような用途にも最適です。

国益にかない、社会に貢献できる。この道筋に合う事業であれば、多少時間的な遅れがあったとしても、その事業は必ず発展するものだと考えます。その意味で、今回ご紹介した新規事業群は、どれも環境問題への「解」を持つ大きな成長力を秘めた事業ばかりです。環境カンパニーとして成長し、人類社会に貢献することこそ、公器たる企業のあるべき姿だと確信しています。

燃料電池の最終ターゲットは電気自動車の動力源ですが、その実現の前に家庭用発電装置市場が立ち上がるように期待されています。セパレーターはその主要構成部品で、当社はカーボン製のセパレーターを製造していま

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

